

国語学習プリント

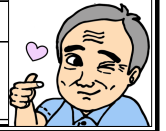
date : 年 月 日

学習内容:

握手 井上ひさし

氏名

年 組 番



握手

井上 ひさし

上野公園に古くからある西洋料理店へ、ルロイ修道士は時間どおりにやって来た。桜の花はもうとうに散って、葉桜にはまだ間があつて、そのうえ動物園はお休みて、店の中は気の毒になるぐらい空いている。椅子から立つて手を振って居所を知らせると、ルロイ修道士は、「呼び出したりしてすみませんね。」

と達者な日本語で声をかけながら、こつちへ寄ってきた。ルロイ修道士は日本の土を踏んだのは第二次大戦直前の昭和十五年の春、それからずっと日本暮らしだから、彼の日本語には年季が入っている。

「今度故郷へ帰ることになりました。カナダの本部修道院で畑いじりでもしてのんびり暮らしましょう。さよならを言うために、こうして皆さんに会って回っているんです。しばらくでした。」

ルロイ修道士は大きな手を差し出してきた。その手を見て思わず顔をしかめたのは、光ヶ丘天使園の子供たちの間でささやかれていた「天使の十戒」を頭に浮かべたせいである。中学三年の秋から高校を卒業するまでの三年半、わたしはルロイ修道士が園長を務める児童養護施設の厄介になっていたが、そこには幾つかの「べからず集」があった。子供の考え出したものであるから、べつにたいしたべからず集ではなく、「朝のうちに弁当を使うべからず（見つかると、次の日の弁当がもらえなくなるから）」、「朝晩の食事は静かに食うべからず（ルロイ先生は、園児がぎやかに食事をしているのを見るのが好きだから）」、「洗濯場の手伝いは断るべからず（洗濯場主任のマイケル先生は気がいいから、きつとバスター付きパンをくれるぞ）」といった式の無邪気な代物で、その中に、「ルロイ先生とうっかり握手をすべからず（二、三日鉛筆が握れなくなっても知らないよ）」というのがあったのを思い出して、それで少しばかり身構えたのだ。この「天使の十戒」が、さらにわたしの記憶の底から、天使園に収容されたときの光景を引っ張り出した。

風呂敷包みを抱えて園長室に入っていたわたしを、ルロイ修道士は机越しに握手で迎えて、「ただいまから、ここがあなたの家です。もう、なんの心配もいりませんよ。」

上に立ててあった聖人伝にぶつかって、腕がしびれた。だが、顔をしかめる必要はなかった。それは実に穏やかな握手だった。ルロイ修道士は病人の手でも握るようにそつと握手をした。それから、このケベック郊外の農場の五男坊は、東京で会った、かつての収容児童たちの近況を熱心に語り始めた。やがて注文した一品料理が運ばれてきた。ルロイ修道士の前にはプレーンオムレツが置かれた。

「おい、そつです。」

ルロイ修道士はオムレツの皿をのぞき込むようにしながら、両のてのひらを擦り合わせる。だが、彼のてのひらはもうギチギチとは鳴らない。あの頃はよく鳴つたのに。園長でありながら、ルロイ修道士は訪問客との会見やデスクワークを避けていた。たいていは裏の畑や鶏舎にいて、子供たちの食料を作ることに精を出していた。そのため、彼の手はいつも汚れており、てのひらは樫の板でも張つたように固かった。そこで、あの頃のルロイ修道士の汚いてのひらは、擦り合わせるたびにギチギチと鳴つたものだった。

「先生の左の人さし指は、相変わらず不思議なことをしていますね。」

フォークを持つ手の人さし指がぴんと伸びている。指の先の爪は潰れており、鼻くそを丸めたようなものがこびりついている。正常な爪はもう生えてこないのである。あの頃、ルロイ修道士の奇妙な爪について、天使園にはこんなうわさが流れていた。日本にやって来て二年もしないうちに戦争が始まり、ルロイ修道士たちは横浜から出帆する最後の交換船でカナダに帰ることになった。ところが日本側の都合で、交換船は出帆中止になってしまったのである。そして、連れていかれたところは丹沢の山の中。戦争が終わるまで、ルロイ修道士たちはここで荒地を開墾し、みかんや足柄茶を作らされた。そこまではいいのだが、カトリック者は日曜日の労働を戒律で禁じられているので、ルロイ修道士が代表となって監督官に、「日曜日は休ませてほしい。その埋め合わせは、他の曜日にきつとする。」と申し入れた。すると監督官は、「大日本帝国の七曜表は月火水木金金。この国には土曜も日曜もありやせんのだ。」と叱りつけ、見せしめに、ルロイ修道士の左の人さし指を木づちで思い切りたたき潰したのだ。だから気をつける。ルロイ先生はいい人にはちがいないが、心の底では日本人を憎んでいる。いつかは爆発するぞ。……しかし、ルロイ先生

はいつまでたっても優しくなかった。そればかりかルロイ先生は、戦勝国の白人であるにもかかわらず敗戦国の子供のために、泥だらけになって野菜を作り鶏を育てている。これはどういうことだろう。

「この子供をちゃんと育ててから、アメリカのサーカスに売らんのだ。だから、こんなに親切なんだぞ。あとでどつと元をとる気なんだ。」といううわさも立つたが、すぐ立ち消えになった。おひたしや汁の実になった野菜がわたしたちの口に入るところを、あんなにうれしそうに眺めているルロイ先生を、ほんの少しでも疑っては罰が当たる。みんながそう思い始めたからである。

「日本人は先生に対して、ずいぶんひどいことをしましたね。交換船の中止にしても国際法無視です。木づちで指をたたき潰すに至っては、もうなんて言っているか。申し訳ありません。」

ルロイ修道士はナイフを皿の上に置いてから、右の人さし指をぴんと立てた。指の先は天井を指してぶるぶる細かく震えている。また思い出した。ルロイ修道士は、「こら。」とか、「よく聞きなさい。」とか言う代わりに、右の人さし指をぴんと立てるのが癖だった。

「総理大臣のようなことを言うてはいけませんよ。だいたい、日本人を代表してものを言ったりするのは傲慢です。それに、日本人とかカナダ人とかアメリカ人といったようなものがあると信じてはなりません。一人一人の人間がいる、それだけのことでですから。」

「わかりました。」

わたしは右の親指をぴんと立てた。これもルロイ修道士の癖で、彼は、「わかった。」「よし。」「最高だ。」と言う代わりに、右の親指をぴんと立てる。そのことも思い出したのだ。

「おいしいですね、このオムレツは。」

ルロイ修道士も右の親指を立てた。わたしは、はてなと心の中で首をかしげた。おいしいと言うわりには、ルロイ修道士に食欲がない。ラグビーのボールを押し潰したようななかつこのプレーンオムレツは、空気を入ればそのままだらう。プレーンオムレツは、空気を入ればそれはナイフとフォークを動かしているだけで、オムレツをちつとも口へ運んではないのだ。

「それよりも、わたしはあなたをぶつたりはしませんでしたか。あなたにひどい仕打ちをしませんでしたか、もし、していたなら、謝りたい。」

「一度だけ、ぶたれました。」

国語学習プリント

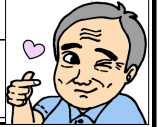
date : 年 月 日

学習内容:

握手 井上ひさし

氏名

年 組 番



ルロイ修道士の、両手の人さし指をせわしく交差させ、打ちつけている姿が脳裏に浮かぶ。これは危険信号だった。この指の動きでルロイ修道士は、「おまえは悪い子だ。」とどなっているのだ。そして次には、きつと平手打ちが飛ぶ。ルロイ修道士の平手打ちには痛かった。「やはりふちましたか。」

ルロイ修道士は悲しそうな表情になって、ナプキンを折り畳む。食事はもうおしまいなのだろうが、「でも、わたしたちは、ぶたれてあたりまえの、ひどいことをしてかしたんです。高校二年のクリスマスだったと思います。が無断で天使園を抜け出して東京へ行ってしまったのです。」

翌朝、上野へ着いた。有楽町や浅草で映画と実演を見て回り、夜行列車で仙台に帰った。そして待っていたのがルロイ修道士の平手打ちだった。「あさつての朝、必ず戻ります。心配しないでください。捜さないでください。」という書き置きを、園長室の壁に貼りつけておいたのだ。

「ルロイ先生は一月間、わたしたちに口をきいてくれませんでした。平手打ちよりこっこのほうがこたえしましたよ。」

「そんなこともありましたがねえ。あのときの東京見物の費用は、どうやってひねり出したんです。」

「それはあのとき白状しましたが……。」

「わたしは忘れてしまいました。もう一度教えてくださいませんか。」

「準備に三か月はかかりました。先生からいただいた純毛の靴下だの、つなぎの下着だのを着ないでとっておき、駅前の闇市で売り払いました。鶏舎から鶏を五、六羽持ち出して、焼き鳥屋に売ったりもしました。」

ルロイ修道士は改めて両手の人さし指を交差させ、せわしく打ちつける。ただしあの頃と違って、顔は笑っていた。

「先生はどこか悪いんですか。ちつとも召しあがりませんね。」

「少し疲れたのでしよう。これから仙台の修道院でゆっくり休みます。カナダへたつ頃は、前のような大食らいに戻っていますよ。」

「だつたらいいのですが……。」

「仕事はうまくいっていますか。」

「まあまあといったところです。」

「よろしい。」

ルロイ修道士は右の親指を立てた。

「仕事がつまらぬときは、この言葉を思い出してください。『困難は分割せよ。』あせってはなりません。問題を細かく割って、一つ一つ地道に片づけていくのです。ルロイのこの言葉を忘れないでください。」

冗談じゃないぞ、と思った。これでは、遺言を聞くために会ったようなものではないか。そういえば、さっきの握手もなんだか変だった。「それは実に穏やかな握手だった。ルロイ修道士は病人の手でも握るようにそつと握手をした。」というように感じたが、実はルロイ修道士が病人なのではないか。元園長は何かの病にかかり、この世のいとま、こいに、こやつて、かつての園児を訪ねて歩いているのではないか。

「日本でお暮らしになっていて、楽しかったことがあったとすれば、それはどんなことでしたか。」

先生は重い病氣にかかっているのだ、そして、これはお別れの儀式なのですね、ときこうとしたが、さすがにそれははばかられ、結局は平凡な質問をしてしまった。

「それはもう、こやつているときに決まっています。天使園で育った子供が世の中へ出て、一人前の働きをしているのを見るときがいっとう楽しい。何よりもうれしい。そうそう、あなたは上川君を知っていますね。上川一雄君ですよ。」

もちろん知っている。ある春の朝、天使園の正門の前に捨てられていた子だ。捨て子は春になるとぐんぐん増える。陽気がいいから、発見されるまで長くかかっても風邪を引くことはあるまいという、母親たちの最後の愛情が春を選ばせるのだ。捨て子はたいてい姓名がわからない。そこで、中学生、高校生が知恵を絞って姓名をつける。だから、忘れるわけはないのである。

「あの子は今、市営バスの運転手をしています。それも、天使園の前を通っている路線の運転手なのです。そこで、月に一度か二度、駅から上川君の運転するバスに乗り合わせることもあるのですが、そのときは楽しいですよ。まずわたしが乗りますと、こんな合図をするんです。」

ルロイ修道士は右の親指をぴんと立てた。

「わたしの癖をからかっているんですね。そうして、わたしに運転の腕前を見てもらいたいのではいっとうか、バスをぶんぶん飛ばします。最後に、バスを天使園の正門前に止めます。停留所じゃないのに止めてしまうんです。」

上川君はいけなな運転手です。けれども、そういうときがわたしにはいっとう楽しいですね。」

「いっとう悲しいときは……。」

「天使園で育った子が世の中に出て結婚しますね。子供が生まれます。ところがそのうちに、夫婦の間がうまくいなくなる。別居します。離婚します。やがて子供が重荷になる。そこで、天使園で育った子が、自分の子をまたもや天使園へ預けるために長い坂をとぼとぼ上つてやってくる。それを見るときがいっとう悲しいです。すね。なにも、父子二代で天使園に入ることはないんです。」

ルロイ修道士は壁の時計を見上げて、

「汽車が待っています。」

と言ひ、右の人さし指に中指をからめて掲げた。これは「幸運を祈る」「しつかりおやり」という意味の、ルロイ修道士の指言葉だった。

上野駅の中央改札口の前で、思い切つてきた。

「ルロイ先生、死ぬのは怖くありませんか。わたしは怖くてしかたがありませんが。」

かつてわたしたちがいたずらを見つかったときにしたように、ルロイ修道士は少し赤くなって頭をかいいた。

「天国へ行くのですから、そう怖くはありませんよ。」

「天国か。本当に天国がありますか。」

「あると信じるほうが楽しいでしょうが。死ねば、何もなないだむやみに寂しいところへ行くと思うよりも、にぎやかな天国へ行くと思うほうがよほど楽しい。そのために、この何十年間、神様を信じてきたのです。」

わかりましたと答える代わりに、わたしは右の親指を立て、それからルロイ修道士の手をとって、しつかりと握った。それでも足りずに、腕を上下に激しく振った。

「痛いですよ。」

ルロイ修道士は顔をしかめてみせた。

上野公園の葉桜が終わる頃、ルロイ修道士は仙台の修道院でなくなった。まもなく一周忌である。わたしは会いに会って回っていた頃のルロイ修道士は、身体中が悪い腫瘍の巣になっていたそう。葬式でそのことを聞いたとき、わたしは知らぬ間に、両手の人さし指を交差させ、せわしく打ちつけていた。

国語学習プリント

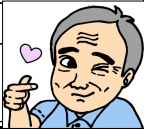
date : 年 月 日

学習内容：ワークシート ①

握手 井上ひさし

氏名

年 組 番



◎ 背景(設定)をさぐる

☆ 時(季節)・場所(舞台)・登場人物

いつ

・ 場所

・ 誰

▽「桜の花はもうとうに散って、葉桜にはまだ間があつて、そのうえ動物園はお休みて、店の中は気の毒になるぐらいすいている。」の件からわかること(なにゆえ、この上野公園の件があるのか)

☆ ルロイ修道士はわたしと会う(呼び出した)目的を何と述べているか。

☆ その手を見て思わず顔をしかめた とあるが、

① 「顔をしかめる」の意味

② 顔をしかめた理由

▽ 回想の「わたしの記憶にある経験上の」握手は

▽ この西洋料理店における再会時の実際の握手は



☆ 天使園にはこんなうわさが流れていた について

天使園にながれていたルロイ修道士に関するうわさ(二つ)

・ 監督官に左の人さし指を木づちで思い切りたたき潰されたところから

・ 白人であるにもかかわらず敗戦国の子供のために、泥だらけになって野菜を作り鶏を育てているところから

▽ 結局子供たちはそのうわさを信じなかったのはどうしてか、理由にあたる一文

【ちよつと一息】

天使の十戒

天使園の子供たちが「モーセの十戒」をなぞって作った
他愛もない戒律集……「べからず集」

・ 朝のうちに弁当を使うべからず

見つかると、次の日の弁当がもらえなくなるから

・ 朝晩の食事は静かに食うべからず

ルロイ先生は、園児がにぎやかに食事をしているのを見るのが好きだから

・ 洗濯場の手伝いは断るべからず

洗濯場主任のマイケル先生は気前がいいから、きつとバター付きパンをくれるぞ

・ ルロイ先生とうっかり握手をすべからず

二、三日鉛筆が握れなくなつても知らないよ 握力が強烈

国語学習プリント

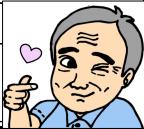
date : 年 月 日

学習内容: ワークシート ②

握手 井上ひさし

氏名

年 組 番



☆わたしは、はてなと心の中で首をかしげたのはどうしてか

☆冗談じゃないぞ、と思ったのは、

まるで

を聞いているようだと思ったからですが、

そう思わせしたのは、どんなところからなのか

▼ルロイ修道士と生徒たちとの間をつないでいたものとは何か考えて見よう

▼ルロイ修道士が何のためにわたしたちに会っているとわたしは思ったか

☆平凡な質問 (二つ)

その一

その二

▼本当に質問したかったことは

▼思い切ってきた質問とは

【もう一度一息】

ルロイ修道士の指言葉についてまとめておこう

・右手の人さし指をぴんとたてる

意味

・右手の親指をぴんとたてる

意味

・両手の人さし指を交差させ、せわしく打ちつける

意味

・右手の人さし指に中指をからめて掲げる

意味

☆ルロイ修道士は少し赤くなって頭をかいた理由を想像してみよう。

☆タイトルにもなっている「握手」について、時系列にのっとって、どんな意味があるのか考えて見よう。

・わたしが天使園に収容された時に交わした握手

・上野公園にある西洋料理店での再会時に交わした握手

・上野駅の改札で交わした最後の握手